

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：23401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652168

研究課題名(和文)内発性を喚起する住民参加型村誌作りの現代的可能性に関する応用人類学的研究

研究課題名(英文) Applied Anthropology research on creating a citizen-journalism style Village Encyclopedia to promote endogeneity.

研究代表者

杉村 和彦 (Sugimura, Kazuhiko)

福井県立大学・学術教養センター・教授

研究者番号：40211982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が対象としたタンザニア・ドドマ・ゴゴ社会の一村での現在進行中の村誌作りの中で以下の三つの論点が研究成果として明らかになった。

第一点は、地域社会の中での「伝統」「在来性」の意味の流動化の中でのアイデンティティの喪失状況。第二点としては、村誌における「地域」の意味の捉え直しの必要性である。ここで対象とした農牧民も含めてアフリカ農村地域社会は「流動性」をはらんでおり、属地的な定住的イメージとは異なる視点の重要性であること。第三点は「内発的発展」の中の村誌プロジェクトの意味である。開発におけるこうした「自己内省」の方法は、他地域の様々な事例に対しても、応用可能なものであること。

研究成果の概要(英文)：During our ongoing research in creating a Village Encyclopedia in the Gogo society in Dodoma, Tanzania, we elucidated the following three issues. First, we understood how flexible the concepts of tradition and custom are in the local society. The agro-pastoralist peoples in East Africa, which are considered to be fairly traditionalist, nonetheless feel their traditions are being lost, and endeavors such as this Village Encyclopedia has a very important role in confirming their identity. Second thing we understood is the need to revise the idea of "region" in terms of a regional magazine such as this. The agro-pastoralists people which are target of this magazine live in societies which are rather open and flexible. A perspective based on completely settled farming societies such as Japan's does not apply well. Third, the meaning of "endogenous development" in our magazine project. This "self-contemplative" method of development is applicable to other various issues in different regions.

研究分野：文化人類学

キーワード：内発的発展 村落開発 歴史の記述 地域情報 地元学 民俗学的方法 地域の覚醒 情報の継承

1. 研究開始当初の背景

今日途上国の現場では、住民のイニシアティブに基づく内発的発展やそのための参加型開発手法が広く展開しており、その深化発展が期待されている。しかし低開発地域の農村では、上記のように今日開発において、住民の内発性が重視されながらも、いまだ住民が自ら地域社会を捉え直し、その地域の記録を作り出すということに関する援助はほとんどなされてこず、その「内発性」に関する論点は限界を有してきた。

開発論において住民のイニシアティブに基づいて内発的発展(鶴見 1989)やそのための参加型開発手法(チェンバース 2001)は広く展開しており、アフリカ農村研究においても、掛谷らの研究グループの中で、長期のフィールドワークに基づく応用人類学的開発研究も展開されてきた(掛谷 2011)。これらは地域の総合的把握と記述を試みてきたが、開発のプロセスの中では内発性が、予測しない住民自身の「伝統」によって急旋回する場合がある。こうした点と連関する内発性の主体である地域住民自身の地域認識や発展のビジョン自身は、これまでの研究では必ずしも主題化されてこなかった。

今日、開発の中で“内発性”を求められる農村自身の伝統文化は大きく変容しており、求められる上からの“内発性”に対して、自らの「伝統」を内省していくプロセスが極めて重要なものとなってきていた。本研究の住民参加型村誌作りプロジェクトは、最も開発の困難な地域の一つである東アフリカ農牧民社会を事例として、現地の NGO との協力の下にこうした研究上の空隙を越えようとするものであり、この研究は予察的なものでありながらも開発人類学の中に一つの新しい研究の領域を生み出す契機となりうることが期待された。

2. 研究の目的

村落の内発的発展にとって、住民自身の地域認識を主題化する<住民参加型村誌作り>プロジェクトがどのような役割を果たすかについて、次の二点を中心的に明らかにすることであった。

1) 村落住民自身のプロジェクトを通して自覚化されるものの内容と意味、また記述されていくものの公共性、またそのことが内発性のあり方に与える影響に関して明らかにすること。

2) 地域記述が、住民によって画定される社会過程と記述され選択される「伝統」の意味とその社会的性格について明らかにすること。

3. 研究の方法

本研究は、近年日本の中では地元学(吉本 2011, 結城 2011, 杉村 2009)というような着想の下で展開している、農村の内発的発展の中に<地域を住民が認識していく>プロセ

スを組み込むような方法の意義と可能性を、途上国の中で急速に展開してきた参加型開発論の議論の中で捉えなおすものであった。ここではまたこうしたことを主題化することによって、内発性の議論の中での住民の地域認識や思考様式、価値意識が関わる内発性との連関での重要性に切り込み、明示化するものでもあった。途上国での開発論は、先進国での開発論を超えて「学」として極めて厚い蓄積を生み出してきているが、その前提となる住民は、記述され、援助されるものとしてのみの立ち位置を与えられ、住民自身が内省し、自らの「地域学」を描く存在として位置づけるものにはなってこなかった。こうした途上国の中に、国家とは別に多元的な地方的「地域学」の形成という、認識レベルでの主体性のあり方を構想し、日本人が日本人を研究することを重視した日本民俗学のように、ゴゴ人がゴゴ人の伝統を掘り起こしていく作業に応用人類学的視点から関与するところに着想の新鮮さがあつた。

本研究は、申請者による文献資料収集などの個人レベルでの研究とこの研究テーマの領域と関わる研究協力者による研究会、ワークショップとにより、基礎的研究として研究テーマを掘り下げると同時に研究方法の確立を行い、将来的にはより組織的な研究プロジェクトに展開していくものであった。

本研究は、研究代表の杉村が研究全体を統括し、研究分担者の坂井真紀子、東京外国語大学講師(開発社会学)が、農村開発における<住民参加型村誌作り>の社会的役割と可能性について中心的に検討した。国内研究協力者の鶴田格、近畿大学農学部准教授(タンザニア歴史研究)、黒田真、福井県立大学プロジェクト研究員(タンザニア地域研究)は歴史・地域記述の方法について検討した。またタンザニアでは研究協力者として、NGO 地球緑化の会のズルンゲ氏、椿延子氏をはじめ、ドドマ大学社会科学部ムワムフーペ教授、若手の歴史学、地理学、社会学の教員が加わった。調査地となるタンザニア・ドドマ州ズグニ村には、NGO 地球緑化の会の活動拠点があり、その NGO の協力の下に、村の中で長老と村落行政官によって組織化された村誌編集委員会が活動を開始した。

3年間の研究の経緯は下記の通り。

<平成24年度>

この年は、ズグニ村で23年からすでに組織化されているインフォーマントとしての長老グループと村落行政官を主体とした村誌編集グループの協力を得て、すでに書かれたゴゴ人による、ゴゴの歴史・文化に関する記述の中で、民族の起源、村落の創生と政治的な正統性に関するスワヒリ語の記述の部分に関して集中的な読み直しの作業を行なった。

同時に旱魃や飢饉が頻発するゴゴ社会においては、様々な危機をめぐる対応が、この地域に固有の記憶とアイデンティティを作

り出している。それゆえこの項目は、書かれる地域記述の一つの中心に位置づけられると考えられている。歴史を「危機への対応史」として描くような歴史記述の方法に関する論点をワークショップにおいて整理した。また流動性の高い農牧民社会において、「故郷」意識がどのように位置づけられているのか、その中で「郷土学」的な村誌づくりがどのような意味を持つのかということについても、より流動性の高い牧畜民社会などとの比較でワークショップを通して検討した。

<平成25年度>

この年は平成23年度から始まった村誌づくりの内容、そのプロセス、成果を村の歴史、文化伝統、経済活動、共同組織、福祉という項目ごとに複数回に渡って連関するアクターとワークショップを行い、検討を重ねた。その際、必要に応じては、編集委員会からの依頼で、ズグニ村の村人に限らず、村外からも参加を要請した。近隣の国立ドドマ大学のムワムフーベ教授などにも適宜参加してもらい、その内容の精緻化に努めた。また村誌づくりの具体的な方法に関しては、村人の自主性を最大限に生かそうとしたので、この年の半ばから村の編集委員会などの中から次のような新しい動きが生まれた。

一つはそれまでのNGOが主導的な役割を果たしていた聞き取りに対して、そのアシスタントの若者が、主体的に老人層に話を聴くという方法が生まれたことであった。このアシスタントは村の青年であり、インフォーマントの信頼も厚く、「村人が村人にゴゴ語で訊ねる」という方法が村誌編集過程で重要な位置を占めるようになった。しかし同時にこのことは活動開始当初想定していた村誌の執筆構成に大きな変更を要請するものとなり、その組み直しも進められ、本研究もそれに対応するものとなった。また同時に村の編集委員会のメンバーのなかから、このような村誌づくりの活動に啓発される形で、自主的に自分の家の家族史を編集したいという要望が生まれた。これは村誌事業と連動するものであり、NGOの判断で村誌に盛り込むことになったが、その家族史は、村という領域をはるかに超えた「移動」を前提としたものであり、一つの領域性で考えてきた「村」「地元」というイメージに対して、村誌が扱う「郷土」の意味を再考させるものとなり、本研究もそれに対応するものとなった。

<平成26年度>

この年は研究プロジェクトの最終年度として、村落の内発的発展にとって、「住民参加型の村誌作り」という事業がどのような役割を果たすかということについて、研究代表者、研究分担者、研究協力者をはじめ、NGO地球緑化の会のズグンゲ氏、椿延子氏、地元の長老や編集委員会のメンバーが加わり検討した。歴史や伝統を軸に「地域社会を記述する」ということは、今日、その意味するも

のが世代間において大きく異なる。特にワークショップでは、急速に変貌する社会の中で書かれた「歴史」を持たない限り、歴史を忘却してしまう若い世代が、村誌づくりの中で作られつつある記述を村の記憶として、どのようにその社会の未来像の形成のために位置づけようとするのかに焦点を当てて、検討を加えた。またそういう村落の中で村民自身が、「地域情報を集積する過程」を欠いたこれまでの村落開発との比較を行った。

4. 研究成果

本研究が対象としたタンザニア・ドドマ・ゴゴ社会の一村での現在進行中の村誌作りの中で以下の三つの論点が研究成果として明らかになってきている。

第一点は、地域社会の中での「伝統」「在来性」の意味の流動化ということの内容である。東アフリカ農牧民のような外部からは「伝統」主義と考えられる地域社会においても住民は予想以上に伝統の喪失感を経験している。同時に現在進行する生活・教育などの急速な変化は、そのような伝統の伝達機会を解体しており、そうした状況に対する大きな危機感を有している。このことは村人・現地のNGOによるシンポジウムの中で主題化された。「伝統」「在来性」に依拠する内発的発展モデルにおいても、その基礎になる住民自体の知識のレベルにおいて大きな格差と衰退状況があり、それゆえこの村誌事業のような自らのアイデンティティの確認過程がきわめて重要になってきていることが明らかになった。また村誌作りにおいて外部から介入するNGOと村人の関係も実践の深化の中で大きく変化していき、主体化を求める過程は、「村人が村人にゴゴ語」で訊ねるというような知識の獲得過程に及ぶことにもなり、今後の新たな研究視点として重要なものになってきた。

第二点として浮かび上がってきたことは、地域誌としての村誌における「地域」の意味の捉え直しの必要である。ここで対象とした農牧民も含めてアフリカ農村地域社会はもとより「流動性」をはらんでおり、定住社会的視点からの「故郷」のような把握がそれ自体現実との関係で大きな乖離を生む。村人の発案による自分史、家族史の記述は、はるかに「地域」を超える移動史である。「村誌」として日本の中で作られた村の記述は属地的な定住的「村社会」の存立が前提となっているが、流動性を帯びたりネージュ・クランの下で作られた属人的な「故郷」イメージの中での村誌のあり方とは異なる。また繰り返す飢饉などをくぐり抜けてきたこの地域での歴史記述は「生産力」の拡大史観では解けない「生存をつなぎとめてきた」社会の記憶として刻まれており、その伝統の解明が開発の前提となることである。

第三点は「内発的発展」の中の村誌プロジェクトの意味である。アフリカ農村地域の住

民が「内発的発展」の方向を必要とし、それとの関係で自らの地域アイデンティティを強く希求しており、その手段の一つとしての村誌作りはまったく新しい試みにもかかわらず、多くの住民が即座に受け入れるものとなっていたことである。対象とした地域の中ではいまだこうした村誌作りの作業が具体的な地域の内発的発展につながる動きになっていないが、この地域と異なるところで内発発展プロジェクトを行っている地域との交流の中で、内発的発展に村の歴史の理解が不可欠であることが確認された。その結果として村落間の交流事業につながったことは、特筆に値するものであった。

このプロジェクトは「民族」や「歴史」を記述するという行為そのものを住民との共同研究プロセスの次元にまで拡張し、“内発性”を内発的に理解するとともにその確立を促進しようとする。またそのことによってそれに寄与する人類学的営為のあり方と可能性を検討しようとするところにその可能性が浮かび上がっている。

このプロジェクトによって、村落開発における、開発の様々なアクターが一致して参画しうる、地域を対象化する<自己省察>のプロセスの一つの端緒を得ることが可能となった。このことは内発性を重視する開発プロセスの深化・発展を意図する他地域の様々な事例に対しても、それを支援する新しい方法と視角を提起することができるともいえ、それゆえこうした<自己内省>の方法は、他地域の様々な事例に対しても、応用可能なものである。各地において希求されている地域の潜在力を生かし、それぞれの地域に相応しい内発的発展のあり方を支援する新しい方法と視角を提起することができる。タンザニア・ドドマの一つの村における村民とNGOを軸とした村誌作りはいまだ進行形として展開しており、今後その可能性についてより学際的総合的な視点から光を当てることによって農村開発の新たな視点を獲得していくことが可能となろう。

参考文献

- 掛谷 誠 2011 『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会
ロバート チェンバース 2001 『第三世界の農村開発 貧困の解決 私たちにできること』明石書店
鶴見 和子、川田 侃編 1989 『内発的発展論』東京大学出版会
杉村和彦 2009 「21世紀の田舎学」世界思想社
吉本哲郎 2001 「風に聞け、土に聞け」『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業 2001年5月増刊号 52号
結城登美雄 2001 「わが地元学」『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業 2001年5月増刊号 52号

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- [1] 杉村和彦 「資本主義を受容するヨーロッパ農村共同体との間 アフリカ小農研究の視園」『西洋史研究』42号、pp.215-226、2012年、査読有
[2] 杉村和彦 「アフリカ小農問題とモラル・エコノミー」『農林業問題研究』第48巻第2号、pp.320-325、2012年、査読有
[3] 坂井真紀子 「農村社会の変容とモラル・エコノミー」『農林業問題研究』第48巻第2号、pp.314-319、2012年、査読有

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

- [1] K.Sugimura (ed.), Rural Development and Moral Economy in Globalizing Africa: From Comparative Perspectives (Proceedings of 6th International Conference on African Moral Economy (26-28 August 2013), pp.1-287, : Fukui Prefectural University.
[2] K.Sugimura (ed.), Endogenous Development and Moral Economy in argo-pastral Community in Central Tanzania、(Proceedings of 6th International Conference on African Moral Economy (26-28 August 2013) Fukui Prefectural University, pp.1-99, 2013年、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 和彦 (SUGIMURA Kazuhiko)

福井県立大学・学術教養センター・教授
研究者番号：40211982

(2) 研究分担者

坂井 真紀子 (SAKAI Makiko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師
研究者番号：70624112

(3) 連携研究者

()

研究者番号：